# Dolcetto o Scherzetto ?

千衣乃

10年後の世界から戻ってきてから数日が過ぎて、気持ちも生活もいつも通りの日常に戻り始めた頃――

「ただいまー」

学校から帰って玄関の扉を開けると、今日は家の中がいつもと少しだけ違っていた。

「あれ？　ん……」

辺りを包むように漂っている、優しくて甘い、いい匂い。

母さんが久し振りにお菓子作りでもしてるのかな。

でも、普段よく作ってるケーキとかとはちょっと違う匂いのような……

ふんふんと鼻を鳴らしながら靴を脱ぎ、一体何を作っているのだろうと思いつつ玄関に足を掛けたところで、奥から母さんが顔を覗かせた。

「ツっ君、お帰りなさい。ちょうどよかったわ。もうすぐパンプキンパイが焼けるところなの。着替えたら下にいらっしゃい。みんなでお茶にしましょう」

「あ、うん……この匂い、カボチャだったんだ」

言われてみれば、と納得していると、オレの呟きに母さんがどこか楽しそうにニコニコと笑いながら言葉を返してくる。

「ええ、今日はハロウィンで、町内の子供達が仮装してお菓子を貰いに回って来るから、カボチャのクッキーを用意してたのよ。せっかくだから、ウチのオヤツはちょっと豪華にパイにしてみたの」

そっか、ハロウィンって今日だったっけ。まだ先か、もう終わってたかと思ってた。

未来で過ごした時間が長かったせいか、何だか日付の感覚が